

小児期の過体重が思春期以降も続くと糖尿病リスク上昇

小児期の過体重が成人期の2型糖尿病リスク上昇と関連することが知られている。本研究では、成人期までに過体重が解消されれば2型糖尿病のリスクが低減するかについて検討した。

7歳、13歳、成人早期（17～26歳）に体重と身長が測定され、過体重または肥満と判定されたデンマークの男性62,565例が対象となった。過体重と肥満の定義は、米国疾病管理予防センター（CDC）の基準に従った。2型糖尿病については国の保健登録からデータを得、30歳以降で診断を受けたのは6,710例であった。解析の結果、過体重の割合は7歳時には5.4%、13歳時には5.5%、成人早期には8.2%となり、2型糖尿病リスクと関連がみられた。その関連性は、過体重の年齢が高いほど、また2型糖尿病の診断年齢が低いほど強かった。また、7歳時に過体重であったが13歳以前に過体重を解消した男性が、30～60歳で2型糖尿病と診断されるリスクは、過体重の経験がない男性と同等であった（ハザード比0.96）。7歳時、13歳時ともに過体重であったが成人早期には過体重でなかった男性は、過体重を経験していない男性と比べ、2型糖尿病リスクは高かった（ハザード比1.47）が、過体重が持続した男性と比べると低かった（過体重を経験していない男性と比較した、過体重が持続した男性のハザード比4.14）。7歳時から成人早期におけるBMI（肥満指数）の増大は、7歳時に標準体重であった場合でも、2型糖尿病のリスク上昇と関連がみられた。

したがって、7歳時に過体重である男児が思春期以降まで過体重が持続していた場合のみ、成人期の2型糖尿病リスクが上昇することが明らかとなった。

出典：The New England Journal of Medicine. 2018; 378(14): 1302-1312.